

北斗句会

北斗句会自選三句(令和三年)

(五十音順)

(二年七月～三年六月の間の三十六句から)

傘 寿

石田きよし

悪事なすやうに傘寿のサングラス
歌留多取る手先鬼滅の刃めく
青鷺の三步やまたも動かざる

しはぶき

大崎石州

しはぶき一つ妻二つ変はりなし
早朝散歩イヴモンタンの枯葉
往く吾の道草となる花の山

エール

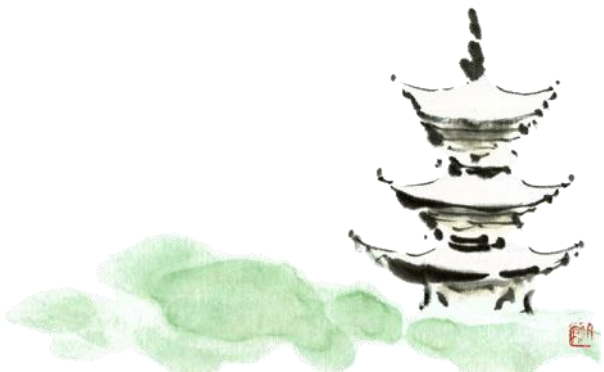
太田黒幸風

兄が逝き順繰り上がる秋の蝉
コロナ禍にエールを送る酉の市
木蓮の白に勝れる白はなし

赤い頬つぺ

大森康正

柔らかな赤い頬つぺに春の風
ひぐらしの呼び込む夜の帳かな
コロナ禍や津々浦々の隙間風



北斗句会

ひとよざけ 竹内雲泉

病床の妻の寝顔やひとよざけ
鷹鳩と化す青空や腕枕

雨しづく丈余に伸びし今年竹

棋譜 田中資凡

棋聖戦の棋譜をたどりて冷し酒
自転車に積む子走る子母の春
渴きたる蚯蚓の骸朝の黙

声明 長池豆陽

声明や紅葉降りしく平林寺
賀客然正座に慣れぬ子らの貌
皮をむく泥ねぎ楚々と臆たけり

満天 深見十万

満天に届けとばかり虫すだく
出来ぬこと又一つ増ゆ落椿
江戸川の波逆立てて春疾風

憂国 藤田紀潮

神宮の杜の世紀や揚雲雀
大拙の墓碑に動かぬ青蛙
憂国の血潮めきたる冬夕焼



北斗句会

ハイキング 宮下ひかる

国宝の小便小僧冬着なし

夕焼の歌聴きながらハイキング

三溪の愛でつ残せし臥竜梅

旅人 森田光彦

奈良井宿旅人駆くる大夕立

宿坊の闇を深めて鉦叩

父の忌にひとり経読む寒さかな

紅蓮 山縣秀雄

早朝の精気貫ふや紅蓮

夕月夜長椅子ひとつ出されをり

冬麗やメタセコイヤの三角錐

日輪 吉岡誠山

日輪を追うて色づく酔芙蓉

光秀の御霊神社や虎落笛

認知症まだ早すぎる桜餅

